

令和7年度 文部科学省委託事業 いじめ対策・不登校支援推進事業  
いじめ・不登校等の未然防止等に向けた魅力ある学校づくりに関する調査研究

# 「心理分野に強みや専門性を有する教師の 育成のための教職員向け研修プログラム」

## 第4章

# 児童生徒の発達的理解と発達の多様性 ー臨床発達心理学の立場からー

元帝京大学・教授／発達と子育ての  
相談室こころころ・代表

近藤 清美

京都文教大学・非常勤講師

西山 剛司

※所属は2026年3月時点のものです

# 1. 発達理論と発達の観点

## (1) 発達の原理

発達とは：受胎から死に至るまでの生体の心身の形態・機能の成長・変化の過程

発達を生涯発達としてとらえる。

- ・ 形態が大きくなったり、機能が増えるばかりが発達ではない。衰えも発達の一つ。

発達には決まりきった道筋と法則がある。

- ・ 発達は、どの人にも共通している。

# 様々な発達の原理

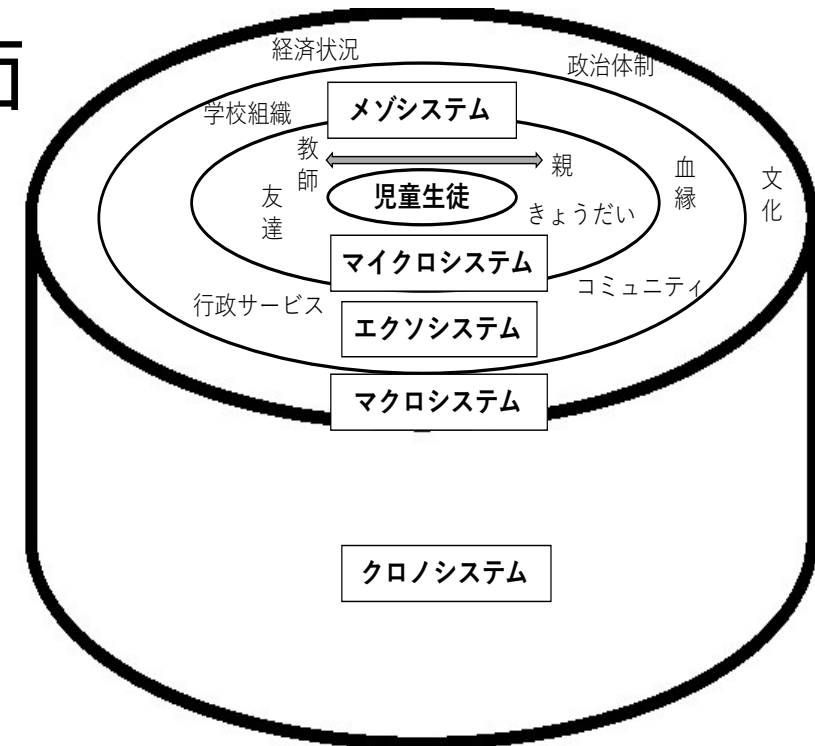
- 成熟説    ゲゼル など
- 学習説    ワトソン など
- 輻輳説    シュテルン
- 環境閾値説    ジェンセン
- 地形図モデル    ワディングトン
- 相乗的相互作用説    サメロフ

# 近年の遺伝学の進歩から

- 遺伝と環境は分かちがたく結びついている。→GE相互作用
    - 遺伝子の発現の各過程で環境の影響がある。
    - 同じDNAであってもたんぱく質合成の過程で作用する環境条件によってできるたんぱく質が異なる。
  - エピジェネテックス：遺伝子もDNAのメチル化やヒストンの化学的修飾や環境による後天的な遺伝子制御を受けて変化する。遺伝子も環境の影響を受ける。(遺伝子をどれを使うか、使わないかというon/offが行われる)
- 発達初期の物理的な側面を含めた環境の重要性が強調されるとともに、遺伝的要素が無視できないことが強調された。

# 生態学的発達理論：Bronfenbrenner

- マイクロシステム：直接の相互作用の場
- メゾシステム：二つ以上の行動場面の相互関係
- エクソシステム：間接的な行動場面
- マクロシステム：文化・社会・政治
- クロノシステム：歴史、時間



# 発達の最近接領域：ヴィゴツキー

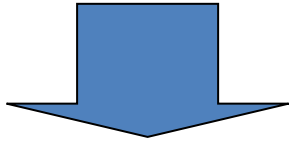
- ✓一人で問題解決が可能な発達水準
- ✓一人では問題解決ができない発達水準

## この間にある領域

一人で解決できないときも**社会的相互作用**によって可能となり、今後、内在化される発達の領域

# スカフォolding：足場かけ

共同で可能になる＝足場を作って助けながら



教育的支援

だんだんに足場をはずしていく。

一人でできるようにしていく。

うまくできるようになると、押さえている手ははずす。



## (2) 発達の観点

① **個体と環境との相互作用**として発達をとらえる。

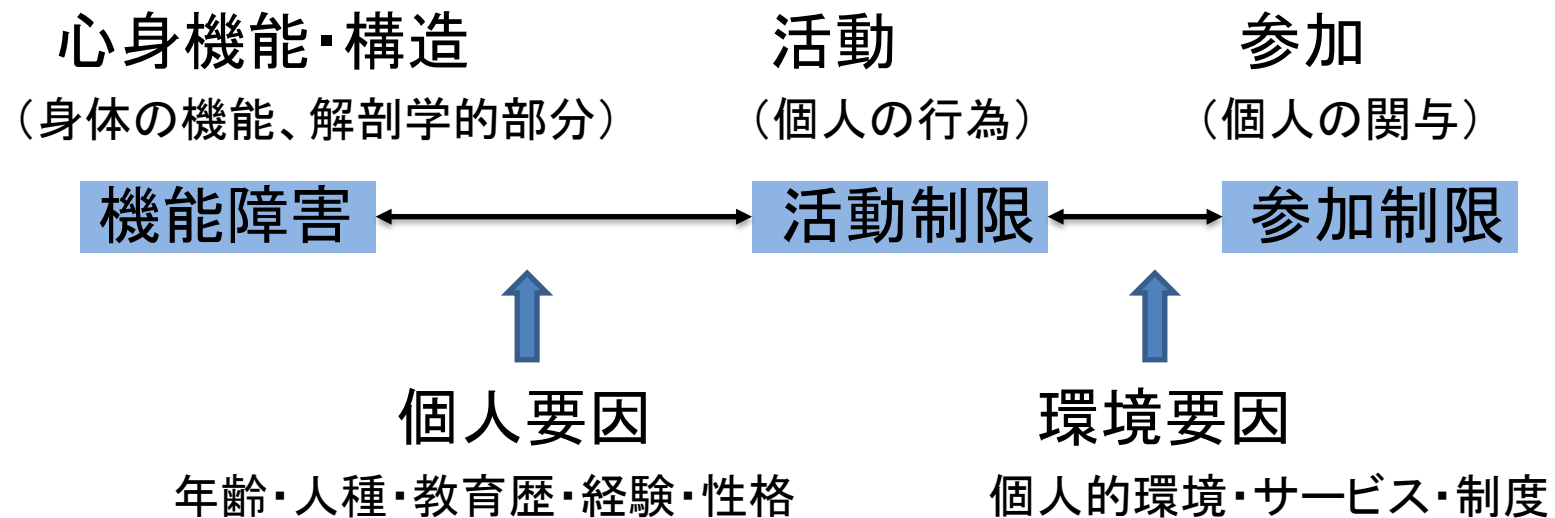
– 児童生徒の現在の姿は個人の特性によるものではなく、環境との相互作用の中で立ち現れている。

= **生態学的視点**

児童生徒を取り巻く環境は入れ子構造になっている。  
様々な環境に取り囲まれて発達している。

# 国際生活機能分類（ICF）によるモデル： 生物・心理・社会モデル

障害を背景因子によって可塑的なものとする



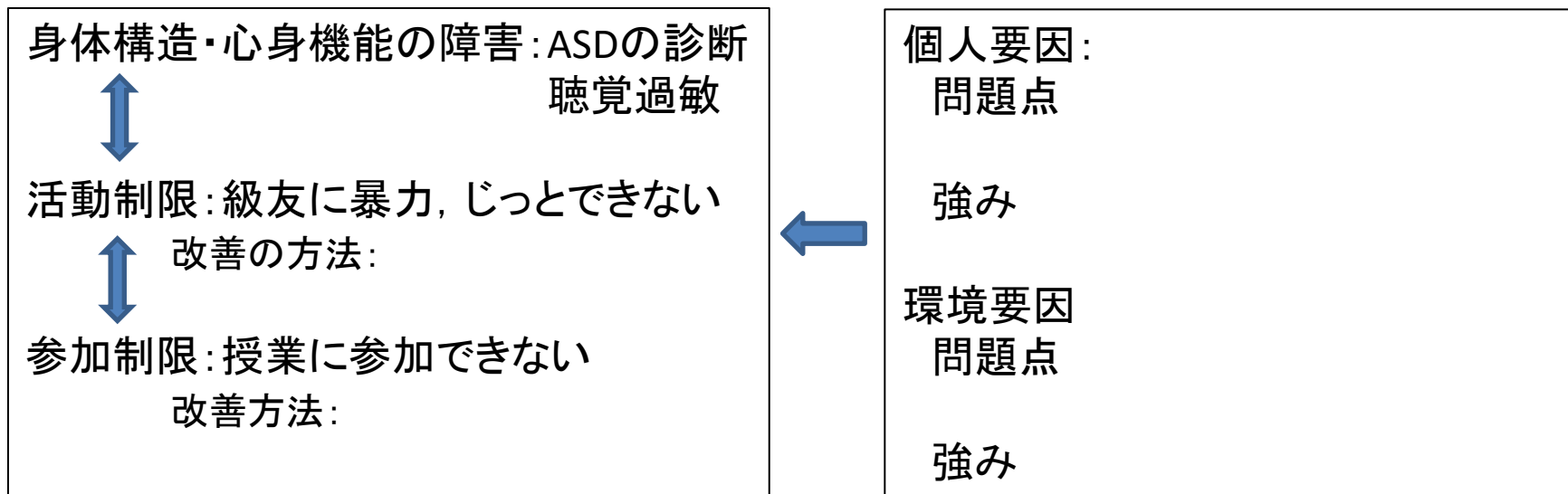
障害による活動制限や参加制限は、個人要因や背景要因という環境の働きかけによっていかようにでも変わる。

# アクティビティ (オンデマンドの場合)

「障害による活動制限や参加制限は、個人要因や背景要因という環境の働きかけによっていかようにでも変わる」ということを、ICF概念図を基にして事例を挙げて考えてみましょう。

太郎は小6男児。ASDの診断があった。文字は読め、学年相当の理解はあったが、明瞭な発語はなく、自分の思いが伝わらないとしばしば物に当たり、時には級友に暴力を振るうこともあった。じっと座っていることが出来ず、なにか気になることがあると直ぐに立ち歩いた。見通しの持てない活動には参加が難しかった。また、聴覚過敏があり、不意の大きな音や騒音は苦手であった。一方、鉄道には興味があり、多くの知識を持ち、列車の走行音の聞き分けも出来た。1人仲の良い友達がいって一緒に列車を見に遠方まで行くことが出来た。

太郎君の活動制限、参加制限を改善するには、個人要因・環境要因の何を利用して支援するとよいでしょう。



## ②過去から未来への時間軸の中で児童生徒をとらえる。

- 現在ある児童生徒の姿は過去の歴史の積み重ねの上にある。発達をとらえるには成育歴が必要
- 願いや将来展望を問わずしては児童生徒をとらえることはできない。

刻々と変化する主体として児童生徒を見る視点が重要であり、過去の制約とともに未来に向かって変わりうる存在としてみる。

③どの児童生徒も発達する可能性がある。

- 発達の原理はどの児童生徒にも同じように働く。
- 発達の速さに各側面で違いがある→発達の凸凹
- ある時期で発達の足踏みがある→発達の停滞
- 体が発達すれば心理的発達もある。

Ex. どの児童生徒も青年期になれば親からの自立を望む。

→インクルーシブの考え

障害や特性があるからと言って必要な環境が用意されていないのは問題である。

## 2. 発達の節目と発達段階

発達はまんべんなく進むのではなく、停滞したり急に進んだりする→発達を段階としてとらえることができる。

	ピアジェの 認知発達理論	フロイトの 心理学的発達理論	エリクソンの漸成的発達理論
			危機の様相
1歳代まで	感覚運動期	口唇期	基本的信頼vs基本的不信
2歳まで		肛門期	自律性vs恥・疑惑
3～4歳まで	前操作期	男根期	自主性vs罪悪感
6～7歳まで		潜在期	勤勉性vs劣等感
12～13歳まで	具体的操作期		アイデンティティ達成 vsアイデンティティ混乱
22歳頃まで	形式的操作期	性器期	親密性vs孤独
40歳頃まで			世代継承性vs停滞
65歳頃まで			自我の統合vs絶望
65歳頃以降			

# 3. 児童生徒の発達と家族・仲間・教師の役割

## (1) 気質と環境との適合・不適合

**気質**とはパーソナリティの初期の表れとして比較的安定したもので、  
遺伝的な基盤をもつ刺激への反応性や自己調節における個人差

気質は、親の子どもへの関わりに影響を及ぼし、乳幼児は気質によって周囲の環境を選び取っていく。

### トマスとチェスの研究（ニューヨーク縦断研究）

9つの気質特性：①活動性、②生理的規則性、③新しい刺激への接近／回避傾向、④順応性、⑤反応の速さ、⑥反応の閾値、⑦機嫌の良さ、⑧行動の可変性、⑨注意の幅と持続性

気質特性の組み合わせと子どもの育てやすさから、①扱いやすい子ども、②扱いにくい子ども、③順応が遅い子ども、④平均的な子ども

**適合の良さ**：気質と周囲の環境の適合性の程度が問題

→気質そのものではなく、環境との関係でとらえることが大切

## (2) アタッチメント

**アタッチメント (愛着)** : 児童生徒が困ったり不安になったときにアタッチメント対象に慰撫を求めて安心感を得る行動方略であり、内的表象

アタッチメントに対する誤解を解く :

- ① 赤ちゃんは初めから複数のアタッチメント対象をもつ
  - ② どのアタッチメント対象も大切で、内的作業モデルはそれらを合わせて統合的に形成される。
  - ③ アタッチメントだけが後の発達を決定するのではない。
  - ④ アタッチメント障害は「反応性アタッチメント障害」だけ
  - ⑤ 様々な人との出会いにより、内的作業モデルは何度も改訂される。
- 教師は児童生徒にとって重要なアタッチメント対象である。

### (3) コンパニオンシップ

人は生まれながらの社会的存在

生後3か月：第一次間主観性をもち、原会話ができる。

**間主観性**：二人の人が相互作用をしながら一つの共通の主観をもつ

赤ちゃん遊び（いないいないばー、たかいたかい等）ができる

生後8～9か月：第二次間主観性を示し共同注意ができる。

物や出来事を介して思いを共通させる。

人との間で気持ちを通い合わせて一緒に楽しむ。対等な関係で共同作業を行う→社会参加の基盤となる。

## (4) 児童生徒にとっての親・教師の役割

安定したアタッチメントをはぐくむために

→ 困った・不安という信号を察知し、適切に解釈して素早く対応する = 子どもの気持ちへ敏感に反応して安心感を与える。

- ・ 信号を無視 → 反応が得られないとあきらめる。低活性方略
- ・ 対応が一貫しない → 反応が得られるか不安。過活性方略
- ・ 脅かす、役割逆転 → 頼れない、脅威になる。葛藤に陥る。

コンパニオンシップを形成するために

大人は児童生徒の気持ちを理解し、気持ちを一つにする。

子ども同士でのコンパニオンシップも重要となり、その場を作る。

→ 子どもの気持ちの理解 = メンタライゼーション（心の内面を分かる）、様々な人の中で気持ちを通い合わせる。

## 4. 発達の多様性と環境の影響

### (1) 「ヒト」の発達の自由度の高さと多様さ

- 未成熟な状態での出産  
脳細胞のネットワーク未完成
- 育てにくいので世話が大変、多くの人の子育てに関わる
- 脳細胞ネットワークの構築に複雑な環境の影響
- 脳は多様になる
- 発達の多様な形は自然であり、どんなかたちの発達も価値の違いはない



## (2) 人の発達、人と環境との相乗的相互作用

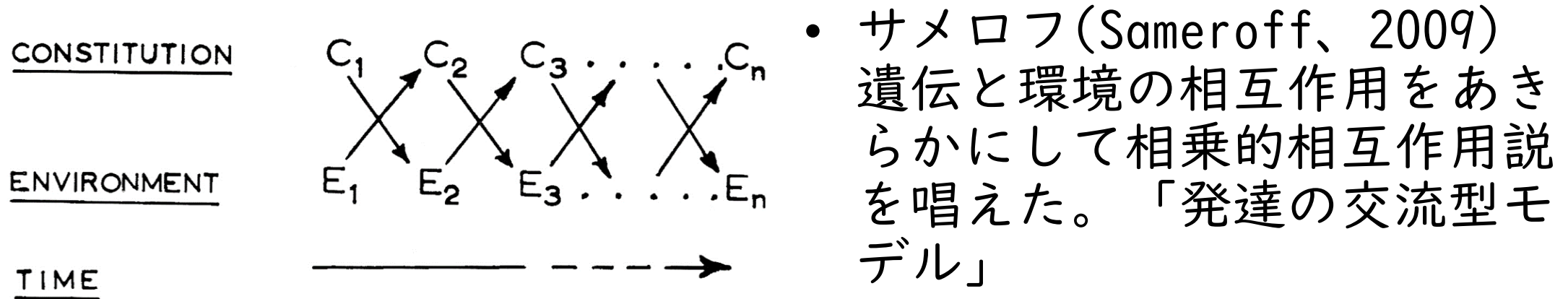


Figure 1.1. Original depiction of transactional model (Sameroff, 1975).

- 個体と環境の双方は「一方の今の状態が他方の次の状態に影響を与える」という形で時間の経過とともに相互に変化していく

# アクティビティー(対面・ライブの場合)

- YES-AND
- 二人組になります。
- 3分間、二人で会話をします。ルールがあります。
- 相手が話したことについて、必ずYESと受ける。つまり、絶対に否定しないで肯定的に受け取る。その上で、どんなことでもいいので新しい提案を付け加える(AND)
- 今日は、「旅行に行こう」をテーマにしましょうか(何でも良い)。一人目の方は相手の方に、まず、「旅行に行きませんか」と語りかけてみましょう。

### (3) 家庭の状況と支援(社会的な環境の影響)

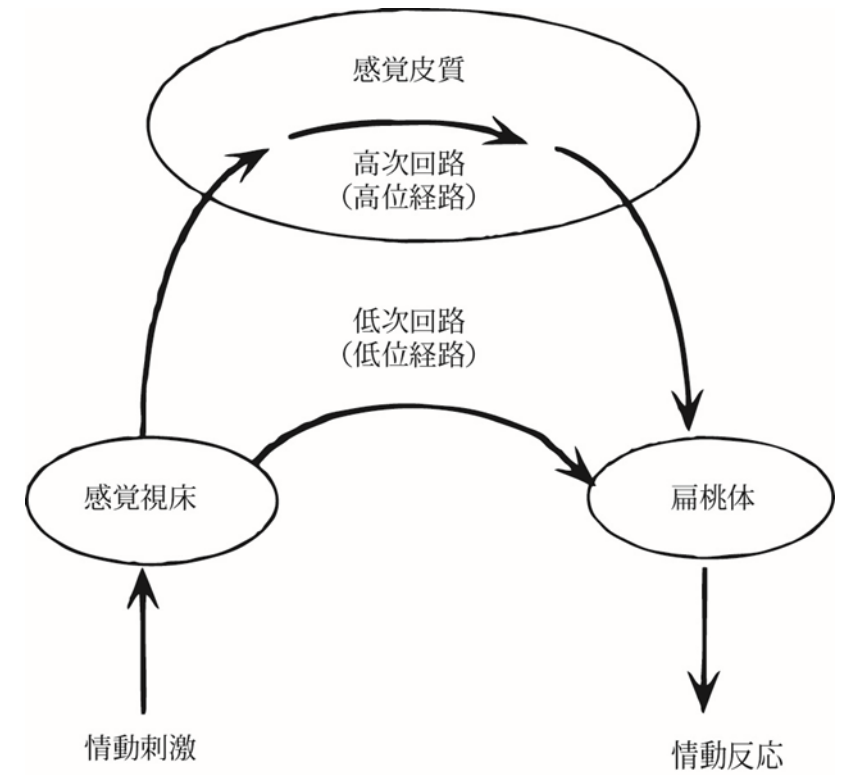
- 基礎的環境の一つ=家庭  
家庭も社会の影響をうけ一様ではない
- 虐待をする親→虐待経験を持つことが多い ○  
虐待経験を持つ親→虐待しやすい ×
- 保護者を取り巻く問題に取り組むこと
- 家庭の多様性。その中に児童生徒がいる
- 他職種との緊密な連携。対等な相互コンサルテーション



# 5. 発達障害をはじめとした、 多様な児童生徒の理解と支援

## (1) 情動の理解と情動調整への支援

- 情動とは
- 情動反応 生命維持のための適応的反応
- 身体的な表出 他者へのコミュニケーション
- 情意的要因による姿勢の形
- 外界を知覚する出発点
- 「情動調整」への支援が重要



## (2)パフォーマンス

# 意思・意欲・主体的に他者とともに取り組む力

- 学ぶ意欲
- 外的動機と内的動機  
アンダーマイニング(褒美や報酬への注意)
- ソマティックマーカー (なんとなく嫌だなと思うか、やってみたいと思うか)
- フロー 没入感 最適体験



# 発達の最近接領域(ZPD)

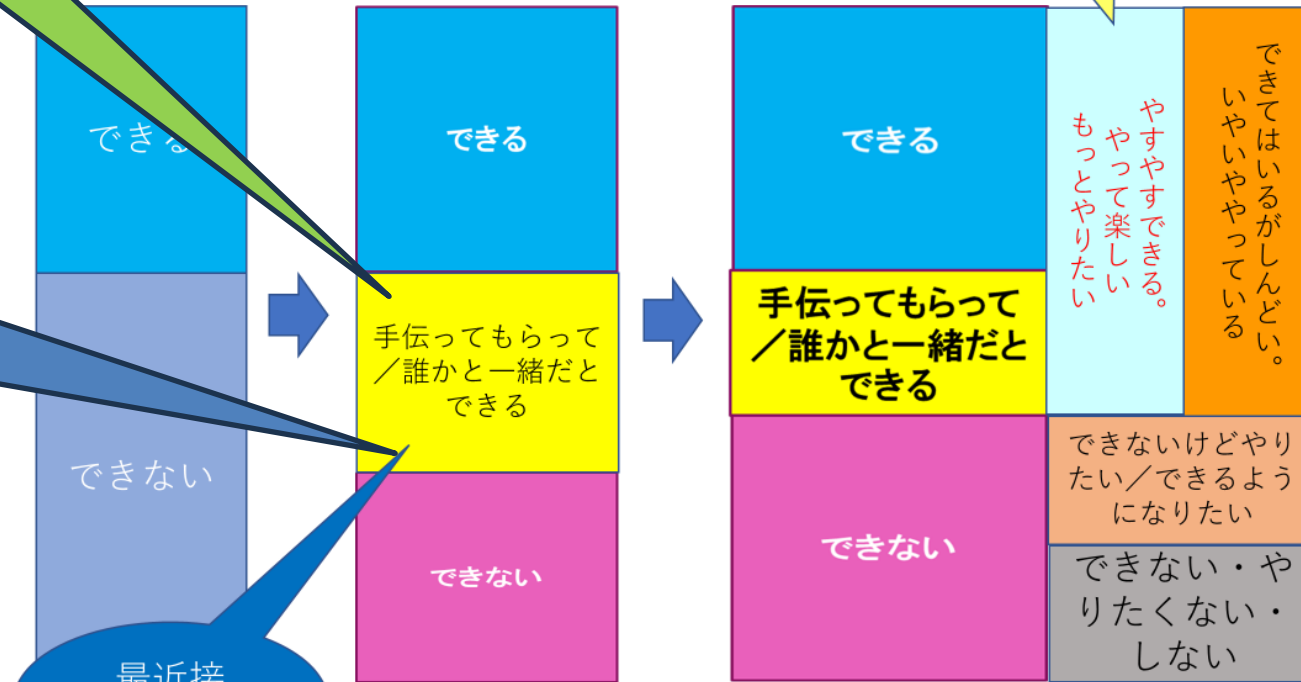
できる / できない

フロー/  
エンゲイジメント

やってよかったかどうかは、  
続けてやる  
かどうかにも  
大きく関わる

子どもと他者の中で、その都度生成される「足場」があり、一人ではできないことができる

「今の自分ではない自分」「頭一つ背伸びをした自分がある」



### (3)他者との関係の中で自己を認め尊重する、 尊重されている自己を見つける

- オープンダイアログ
- リフレクティングプロセス
- ポリフォニー
- メンバーすべての平等

だれの言葉も否定されない。  
複数の言葉が同じ価値を持つものとして  
並行して存在する。

専門家の話し合いをのぞき見る

安心と信頼の中で自己の確立を実現



## (4) 発達障害、その他の障害

- 発達障害とは DSM-5では  
知的発達症・ID、自閉スペクトラム症・ASD、注意欠如/多動症・AD/HD、  
限局性学習症・SLD、発達性協調運動症・DCD
- 脳神経のネットワークの違い
- この違いが直接障害なのではなく(一次的障害)、この特性が社会と関わる際に乗じる生活上・学習上の不便さや不都合が障害(二次的障害)
- 支援は、まず、環境を調整し生活や学習に不自由なくすること
- 「障害のある人に新たな権利を与える」のではなく、他の人も享受している当たり前の権利を平等にすることに過ぎない
- どの児童生徒も自由に生活したり学習し、最適な発達を実現すること
- 「障害」概念は歴史的なもの

## 6. ニューロダイバーシティとインクルーシブ (1) 「障害者」ではなく「特別な(個に応じた)支援ニーズのある人」という視点

その児童生徒がもつ何らかの状態(一次的障害)が社会と関わるときに生じる困難や不都合(二次的障害)が現代的な「障害」の本体

ならば

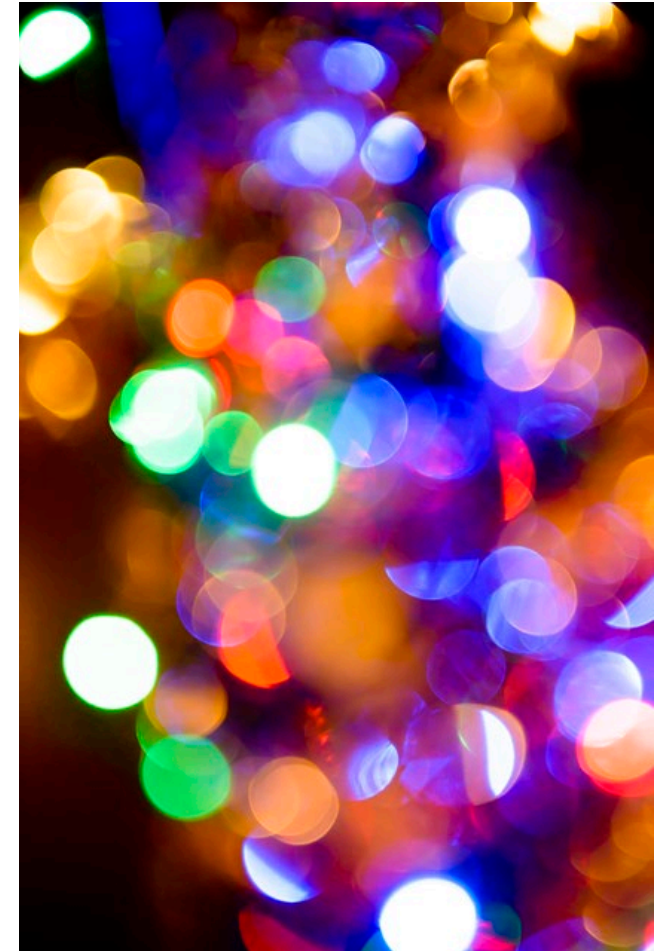
「その児童生徒がもつ何らかの状態」は「心身の障害」でなくてもよい  
→ 特別な支援ニーズがある人

# 支援・被支援を固定しない

- 困っていること、援助があった方がいい状況にある人には、それを援助できる人が援助すればいい
- つまり、支援・被支援の関係を固定化しない
- 多様な人が多様なままで、誰もがその力を使って助け合えるという人間関係の構築
- 「個人の問題、個人の内的なこと」ととらえるにとどまらず、「発達=今のコミュニティーの中で幸せに生きていけるように変化すること」として環境との関係でとらえ直してみる
- 個体に対する支援と環境に対する支援は、どちらか一方ではなく、相互に統一的に存在する

## (2)ニューロダイバーシティ 特性(個性)と障害と

- ニューロダイバーシティ 神経多様性
- もともとは1990年代に、ASDのある人の権利擁護の取り組みの中から提起された。
- すべての個体は一様ではない。個体ごとの多様性は、他の動物に比べても大きい。
- 少数派の思考や感覚が多数派と大きく違っていても、人類の発展における価値として、何ら変わることはない。



### (3) インクルーシブな社会を目指して

- インクルーシブ 多様な個人がそのまま存在し相互に自由に交流し合うこと、すべての人のあらゆる存在がそのまま受け入れられている状態
- ノーマライゼーションやバリアフリー・ユニバーサルデザインの考えを含み、より高次の捉え方。
- 未来社会像として「他者の幸せが自己の幸せの前提であり、両者は不可分である」という道徳が成立する社会



# 引用文献

アンデルセン(1991)『リフレクティング・プロセス 会話における会話と会話』(2015) 鈴木浩二 監訳  
金剛出版  
エリクソン(1982)『ライフサイクル、その完結』(2001) 村瀬孝雄・近藤邦夫訳、みすず書房  
ヴィゴツキー(1924) ヴィゴツキー『障害児発達・教育論集』(2006) 柴田義松他 訳 新読書社  
ヴィゴツキー(1935)『「発達の最近接領域」の理論』(2003) 土井捷三他 訳 三学出版  
ゲゼル(1952)『乳幼児の心理学—出生より5歳まで』(1978) 山下俊郎(訳) 家庭教育社  
セックラ/アーンキル(2014)『開かれた対話と未来』(2019) 斎藤環監訳 医学書院  
ダマシオ(1994) DESCARTES`ERROR(『デカルトの誤り』(2010) 田中三彦訳 筑摩書房)  
チクセントミハイ(1990)『フロー体験 喜びの現象学』(1996) 今村浩明 世界思想社  
トマセロ(1999)『心とことばの起源を探る』(大堀壽夫他 訳(2006) 勁草書房  
Bronfenbrenner(1979)『人間発達の生態学(エコロジー): 発達心理学への挑戦』(1996)  
磯貝芳郎、福富護訳 川島書店)  
ポージェス(2017)『ポリヴェーガル理論入門』(2018) 花丘ちぐさ訳 春秋社  
ホルツマン(2009)「遊ぶヴィゴツキー 生成の心理学へ」(2014) 茂呂雄二訳 新曜社  
ルドゥー(1996)『エモーショナル・ブレイン 情動の脳科学』松本元他 訳(2003) 東京大学出版会  
ワロン(1938) ワロン『身体・自我・社会』浜田寿美男訳編 (1983) ミネルヴァ書房

# 推薦図書

氏家達夫編著「発達と教育をつなぐ心理学 自立的なエージェントとして子どもをとらえる」(2025)ナカニシヤ出版

麻生武・浜田寿美男編「よくわかる臨床発達心理学[第4版](やわらかアカデミズム・<わかる>シリーズ)」(2012)ミネルヴァ書房

臨床発達心理士認定運営機構監修、山崎晃・藤崎春代編「臨床発達心理学の基礎(講座・臨床発達心理学第1巻)」(2017)ミネルヴァ書房

田島信元・南徹弘・日本発達心理学会編著「発達心理学と隣接領域の理論・方法論(発達科学ハンドブック第1巻)」(2013)新曜社

根ヶ山光一・仲真紀子編著「発達の基盤:身体、認知、情動(発達科学ハンドブック第4巻)」(2012)新曜社